

自然配植技術協会 ニュースレター

自然配植技術協会

〒603-8145 京都市北区小山堀池町 28-5

TEL/FAX : 075-254-6014

E-mail : shizenhaisyoku@pep.ne.jp

URL : <http://www.shizenhaisyoku.org>

目次

1. 巻頭言 ～時代の中で考える～ p 2
自然配植技術協会会長 高田研一
2. 森林・林業と自然配植技術..... p 4
富山県高岡農地林務事務所 草島すなお
3. 自然配植技術協会集中セミナーに参加して..... p 8
松居農園株式会社 松居奈緒子
4. 自然配植技術協会集中セミナー..... p 9
5. 自然配植技術協会第 6 回定時総会 議事録..... p11
6. メーリングリストバックナンバーから..... p15
7. 事務局よりお知らせ..... p19

巻頭言 ～時代の中で考える～

自然配植技術協会会長 高田研一

私には青年期を迎えている二人の息子、一人の娘がいて、その彼らがどのような仕事を将来することになるかについて、人並みに考える。しかし、わが子のことだけを考えているつもりでも、ついつい、わが国の将来の人々の暮らしがどのようなかということに想いがいつてしまう。

江戸時代、わが国は四千万人国家であった。幾たびかの飢饉や災禍を乗り越えながら、世界に、地球に迷惑をかけることなく生き抜いてきた。これが明治、大正、昭和へと進むにしたがって、飛躍的に人口を増やし、人々の体格は良くなり、もはや「姥捨て」や「間引き」に迫られることもなくなったし、だれでもが望めば伴侶をもつことができるようになった。

すべては産業革命以来の資本主義文明＝化石燃料の利用による安価なエネルギーの供給のお陰であり、これこそが莫大な余剰資本をもたらし、科学が発展し、その相乗として、ますます安価なエネルギーの有効利用が進むようになった。

しかし、時代は大きく変化しつつある。

先日、京都を囲む山々＝森に手を入れようという趣旨の委員会があり、そこでの議論を聞いていると、「市民の癒し」、「子どもたちの体験」、「豊かな風土」というごく高尚な言葉が飛び交っていた。誰もが否定できない奇麗な言葉の数々を耳にして、私はどこか違和感を感じていた。

多くの人々はまだ気がついていないかもしれないが、市民の癒しのための森づくり＝そんな余裕はどこにあるのだろうか。

わが国が先進国の一員として、国民だれでもが経済的余裕を謳歌していた時代は、いま徐々に、しかし確実に過ぎ去ろうとしている。世界に冠たる大企業の工場ではそこで働く大半の労働者が非正規雇用の人々に置き換わっている。非正規雇用、特に派遣会社に所属しながら、請け負いで働かざるを得ない労働者の待遇は、正規雇用労働者＝正社員に比べ格段に低い。恵まれた正社員どころか、一方では、キャッシュで億単位以上の金を積んで、豪壮な住宅を求める者もいる。わずかな夢を託して、「お笑い」の世界を志向し、ビッグになりたいという若者も多い。

化石エネルギーの時代は、拡大再生産の時代であって、すべてが右上がり＝経済の成長へと向かい、これが物質の豊かさ、生活のゆとりをもたらせてきたが、先進国内部の資本の再配分、富の平等化の作業が近年徐々に圧縮する方向へと向かっている。つまり、富の再配分が企業競争力を低下させるという危機意識があって、この十年間は方々で大きな政策転換が行われるようになってきた。

資本は集中することのみ意義があり、世界を制する金融市場の有力メンバーを輩出することだけが、わが国が先進国経済を維持する唯一の道だという認識に基づく政策転換である。こ

のことは、社会内部の競争を激化させ、ここ数年話題となっているように、貧困と富裕の格差をもたらせつつある。

しかし、その解決は、実現が難しい、旧い時代のやり方ともいうべき、公共事業などを通じた社会的再配分の復活程度の方策しか示されていない。

こうして、国民経済の中で著しい格差が拡大する一方で、環境問題はますますその厳しさを増している。地球温暖化は異常気象の形を取りながら、徐々に人々の意識にのぼるが、逆に、その温暖化をもたらした化石燃料が枯渇する時代、富を与え続けてくれた化石資源が不足する時代が見通せるようになってきた。

経済は、グローバルスタンダードに代表されるアダムスミス以来の原理主義的資本主義が当たり前かのように思われているが、こういった超自由主義経済では地球全体の環境問題が解決できないという意見がやがて大勢を占めるようになるであろうことは想像に難くない。

自然配植で木を植えるとき、だいたい数年後の短期的目標、二、三十年先の中期的目標、五十年、百年先といった長期的目標の三つの目標を立てる。

経済の世界では、しかし、こういった中期的、長期的目標を議論する学者は存在しない。

京都の森の手入れをしようというなら、今、十分に物質的幸福の渦中にある市民のために、これ以上の便宜を図る必要はもはやないと思う。むしろ、京都経済の大きな柱である観光客が決して減ることがないように、世界中から、物見遊山の金持ちたちがやって来て、たくさんのお金を落としてくれ、錯覚でもよいから、美しい

日本(?)、美しい京都イメージにつながる「稼げる森づくり」に資本を投下することにこそ意味がある。あるいは、将来山崩れが発生して、貴重な資源が失われることがないように、「予防的投資としての森づくり」に意義がある。

しっかりとした経済的基盤に立って始めて、われわれが享受してきた生活の持続が可能であり、現状をさらに良くしようなどという大それた目論見が叶うほど気楽な世界情勢にはないことは間違いないのではないかと。

経済、社会的な背景の中で、今後の百年間でゆっくりとわが国人口は減少し、ついには八千万人国家といわれるまで、低落するだろうという予測的を得ているかもしれない。これは、地球環境的にみれば、ある意味では健康な成り行きだとも思える。しかし、経済の退行、人口減少は大なり小なり痛みをともなうものであって、その痛みは、人々の求める「幸福」のベースに物質的、金銭的な価値を中心に置いている限り、癒すことのできないひどい痛みとなつてのしかかってくると思われる。

木を何本植えたかが問題ではなく、植えた木が元気に育つことが重要であるし、元気に育った木がわれわれの社会生活、経済生活に恩恵をもたらせてくれることにこそ意義がある。一本の苗木を植えたことによって代償が支払われる時代から、植えた苗木が育って人々に恩恵を与えることによって初めて報酬が支払われる時代がやってこようとしている。

そこで重要なのは、技術であることは間違いない。

森林・林業と自然配植技術

富山県高岡農地林務事務所 草島すなお

はじめに

私は富山県職員として、主に森林・林業に関する仕事をしている。自然配植緑化のことを知ったのは今から5年前で、たまたま参加した法面緑化業界の主催する講演会で、高田先生のお話を聞き、「これだ。」と直感した。

以来、森林公園をつくる時、植樹祭の開催に際して、そして、今は林道の法面緑化と、私の関わる現場の先々で自然配植技術のお世話になり、その都度高田先生には富山まで足を運んで頂いている。

自然配植の考え方は、森林・林業に携わる者

にとっても有効な理論であると思われるが、現場（森林整備、木材生産、治山、林道事業等々）でその技術が実践されている例は少ない。造林も、治山も、林道法面の緑化もあまり技術の進歩が見られないようで、私も含めて関係者の勉強不足に大きな要因があるのではないかと考えている。

こうした状況の中で、最も保守的な公共事業に自然配植技術を導入しようとしている訳だから、様々な問題に直面するのも致し方ないようにも思っている。ここでは、実際に経験した自然配植技術の実践例を踏まえて、今後の課題などを考えてみたい。

自然配植技術の具体的活用事例

私のような県職員は2～3年で担当する仕事の内容が変わることが多く、一つの仕事を同じ人間が計画、実行、評価、改善といったPDCAサイクルで実践することはほとんどない。ある程度のルールを敷いて次の担当者にバトンタッチするわけであるが、そこは人間のすること、担当者が変われば、仕事の進め方や考え方も変わってしまい、なかなか思うとおりにはいかないものである。そういった、反省点も含めて、紹介したい。

富山市山田村で実施している森林公園
「KORO(コロ)りんの森」

山田村（平成17年に合併して富山市となる）

は平成15年度から19年度の5カ年計画で土砂採取跡地約5haを森林公園として造成している。この事業には、国(林野庁)及び県の補助金が投入されており、私は補助金を出す側として、この事業に計画段階から関わってきた。

① 基本計画の策定

日本中、公園は星の数ほどあるが、本当にいい公園はどれほどあるのだろうか？私にとってのいい公園とは、「人で賑わって、かつ維持管理費がかからない公園、さらには、お金が儲かる公園」である。国の補助金が入る場合、それぞれの省庁に関連がある東京のコンサルタントが基本計画を策定する例がある。

その結果、先々の管理運営を全く顧みない「作りっぱなしの金食い虫の施設」になったり、「金

太郎飴のような施設」が全国至る所にできたりする例を時々見かける。

今回は、こうしたことにならないよう、基本計画は将来的にこの公園と関わっていく意志を持つ人々（「森と人ネットワーク」という団体）によって策定してもらうことにした。計画策定にあたっては、高田先生にもアドバイスをいただいたが、地域産苗木を生産する「森の苗(こ)畑」や自然配植技術を持ったプロの専門家が植栽する「木の香(か)の森」の他、市民に一定のエリアを分譲して庭を作り上げてもらう「すくすく林(ばやし)」などが計画されている。

森林公園が人を呼び、多少なりとも地元にお金が落ち、そのお金で公園が維持していけるような施設となれば、と思っている。

② 実施設計の策定

基本計画の精神を実際の図面に詳細に表現するのが実施設計であり、基本計画の精神を十分に理解しないと実施設計はできないはずである。今回の森林公園に関しては、これまでの公園設計の手法と異なることをコンサルタントに十分理解してもらう必要があることから、発注にあたって作成する特別仕様書には、自然配植技術を活用した設計に関する注文内容などを細々と書き連ねて色々と工夫を凝らしてみた。が、能力がなければ、どうしようもない。

実施設計にあたっては、基本計画策定に携わった人々も含め、何度も協議を重ねたが、あまり満足する成果を得ることはできなかった。コンサルタントは「水は1箇所に集めてまとめて排水するもの」、「排水施設は塩ビ管かコンクリート二次製品」といった従来の土木の発想から抜け出ることが出来ないようであった。メンテナンスフリーの自然配植技術を実践できるコンサルタントの必

要性を強く感じた。

③ 植栽工事

植栽工事にあたっては、入札参加者に「自然配植技術を有していること」を工事を請負う条件にしたにも拘らず、なりふり構わない業者が落札してしまったようである。

こういったことを考え合わせると、実施設計から工事に至るまでの請負業者のあり方に工夫の余地があるように思われる。単に「自然配植技術を有すること」だけでなく「多様な樹種の地域性苗木を利用すること」や「自然配植の実績を有すること」など、その時々において、様々な条件を設け、真に技術のあるところが工事を請け負えるような仕組みづくりが必要である。

そして、何よりも大切なことは、こうした仕事を請け負える技術者が地方で育っていくことであることは言うまでもない。

④ 現況

平成16年度の実実施設計策定に関わった後異動になり、先日、久しぶりに現地を訪れたが、なかなか理想どおりにはいかないものである。森林公園の植栽工事に使う地元の苗木についても、計画的なストックが不十分であった。それでも、地元の小学生が植えたオオヤマザクラの苗木は「森の苗(こ)畑」ですくすくと育っており、私の心を癒してくれた。これは、現在私が関わっている林道法面の緑化（次章で紹介）でも使う予定にしている。

完成後の森林公園の活用と今後の管理運営については、旧山田村の職員や基本計画策定に関わったメンバーたちで協議を始めている。色々と課題はあるにせよ、これまでとは全く異なった新しい形態の森林公園を創造する意義は決して小さくないと考えている。

林道の切土法面緑化

① 現状と課題

林道法面については、これまで種子吹付工、厚層基材吹付工及びこれらと同程度の機能を有する植生マットなどにより緑化を図ってきたが、過去の施工地を見ると、ヨモギや牧草類などの草本類かヤマハギに覆われた法面が多く、目的とする周辺からの在来種の侵入による樹林化にはほど遠い状況にある。こうした法面では、ときに表層崩壊の発生する場合もあり、かねてから木本類の根系発達による法面崩壊防止が期待されている。



林道の切土法面

② 計画

こうしたことから、氷見市で施工されている林道氷北(ひょうほく)線において、エコプランターを使った地域性苗木による植栽によって法面の安定を図ると共に周辺の景観とマッチした法面の造成を計画した。また、エコプランターの設置と併せて、椰子ネット(ネット敷設後、牧草種子を吹付け)を併用し、初期の表面浸食の防止とクズ等の侵入によって植栽苗木の生長が妨げられることのないよう配慮した。

③ 実施

施工にあたっては、いくつかの問題点が発生し、

以下のような対応をした。

◆ 当初計画では、エコプランターを定期的に配置し、植栽樹種は先駆性樹種、中・後期性あわせて数種類のみであったが、実際に切土工事を終えてみると、土壌的に3種類の切土法面が現れ、全てを一律に計画することは不相当と考えられた。

このため、高田先生に急遽氷見までお越し頂き、法面緑化研修会を実施した。研修会には、工事請負業者、実際にエコプランターによる緑化を担当する鶴巻さん、エコプランターを納入して頂く小泉製麻さんの他、本県の林業試験場の研究員、我々林道担当者など約20名が参加した。



法面緑化研修会の様子

一通り、約1000mの林道法面を見ながら先生に解説をしていただいた後、実際にエコプランターの設置位置やそこに適する樹種などについて検討した。エコプランターの設置位置決定については、私も試みたが、実際の設置位置を図面に落としてみると、その善し悪しがよく見えてきた。先生のそれはメリハリがあるが、私の計画したものは間抜けた感じがするのである。ランダム集中配植の難しさを痛感した。ただ、現場での研修会は、自然配植緑化を理解してもらおううえで、とても意義深いものであった。

◆ これまで、8分勾配かつ多雪地帯での施工実績がなく、元請業者からエコプランターが冬季間のうちに崩壊しないか疑問が投げかけられた。

これに関しては、当地の雪崩防止策の設計積雪深が2mであることを参考にして、エコプランター1基に対し250kgの重さの土のうを積上げて積雪に見合った耐荷重について検証した。結果は、従来型のアンカーでは、もたず、改良型のアンカーで施工することとした。

◆ 植栽する苗木の確保が十分ではなかった。

検討後まもなく設計に組み入れたため、準備期間が十分でなく、現段階で可能な範囲で苗木を調達することとした。幸いにも、林業試験場の協力も得ることができ、約20種類の苗木を利用することができた。今後は、当林道周辺から採取した種子や苗木を積極的に活用していきたい。

④ 今後の課題

今回の実施にあたって、いくつかの課題が見え

てきた。

◆ 請負現場の工事責任者は、施工後の瑕疵担保責任の観点から非常に慎重であった。新しい工法を提案するときは、他県での施工実績、崩壊に対する安全性など、かなりのデータをそろえておく必要がある。

◆ エコプランターの設置位置、植栽樹種及び植栽位置の決定などの業務を誰がするかである。

今回は、最初の部分は高田先生に決めて頂き、残りは先生の研修を思い出しながら、素人同様の私が決めた。今後は、こういった業務を誰が行なうか、また、その場合、どのような仕組みを作るのか、そして、それを設計にどうやって組み込むのか、また、その歩掛かりはどうなるのか、などについて整理していく必要がある。

おわりに

私は、NPO法人「とやまの木で家をつくる会」に所属している。当会の活動の発端になった森林の荒廃の“主人公”はスギで、当会はスギの良さを積極的にPRし、家づくりの主役として利用している。二年前に建てた我が家では、スギ以外にもクサアテ（外部建具）、カナアテ（土台や窓枠）、キリ（障子戸）、ヤマザクラ（食卓のテーブル）といったとやまの木を「適材適所」に使うことができた。それぞれの木の良さを実感するとともに、これらの木材がスギとは対照的に資源的にも人的（このような材を扱える職人）にも貴重な存在になっていることを痛感した。

経済のグローバル化が進展し「効率」や「スピード」が優先される中、住宅建築においても、手間のかからない施工しやすさが重要視されている。こうした基準に照らせば、前述の木材は

除外される傾向にある。

その一方で「ロハス（lifestyle of healthy and sustainability）」といった言葉に見られるように、これまでとは異なった価値観を暮らしに取り入れる人も増えている。

こういった価値観が「適材適所」の家づくりで能力を発揮する職人や「適地適木」の多様な森林づくりを育むと期待している。

多様性豊かな森林とそれを活用する人々との営みが息づく山村、これが真の森林と人との共生なのではないか。都市と地方の格差が拡大し、過疎化が加速する中で、山村の将来の姿はなかなか見えないが、理想の里山像を思い描きながら百年、二百年後を見据えた森づくりに携わっていきたいと考えている。そして、それを可能にするのが自然配植技術だと確信している。

自然配植技術協会集中セミナーに参加して

松居農園株式会社 松居奈緒子

9月5日～9月8日まで奈良教育大学で行われた4日間の集中セミナーに参加させていただき、とても有意義で充実した毎日を過ごさせていただきました。9月から実家の会社で働くことになった私にとって、自然配植に関心を持った様々な業界の方々と、一緒に学んだり話せたことは、とてもよい経験でした。

セミナーでは、自然配植の基本的な考え方から、土壌論、樹木生長論、景観論、緑化論など、自然配植を行ううえで必要な知識を4日間で詰め込みました。



受講風景

最終日の設計実習では、各々が容器に土を盛り、好きな地形を作成し、爪楊枝を樹木に見立てて配植を行い、高田先生にアドバイスをいただきました。実際に配植してみると、樹木の種類や生育特性など基礎的な知識がわかってないと多様で美しい景観の配植はできないことに気がつきました。

これからもっと、現場を知るために、森を歩いたり庭園を見学しながら、知識を深めていきたいと思いました。



設計実習の様子

また、夜に行われた懇親会では、様々な年代の方からいろんな考え方や、経験談等の話を聞かせていただき、交流を持たせていただいたことは、私にとっては貴重で楽しい思い出となりました。

今後は、このセミナーで得たことや学んだことを自然配植や地域性種苗の生産に生かせるように、少しずつ経験を積んでいきたいと思っています。

最後に、高田先生をはじめ、講師の皆様、スタッフの皆様大変いい機会を与えていただいたことに深く感謝いたします。ありがとうございました。

自然配植技術協会集中セミナー

前項でもご紹介しましたが、9月5～8日に奈良教育大学で自然配植技術協会集中セミナーを実施しました。これまでは京都・愛知・大阪・東京・岐阜・長野・三重・福岡で月一回の講習というかたちで一年をかけて行ってきましたが、今回は高田研一先生(生態学者)に加え、武田純先生(岐阜県立国際園芸アカデミー教授)、松本茂先生(樹木医)、山田守先生(日本緑化工学会理事)を講師に迎え、4日間の短期集中で行いました。

内容

1日目 (9/5)

12:30 受付開始

13:00 開講式(挨拶、講師紹介、オリエンテーション)

1:40～5:00 自然配植の基本的な考え方、地形・地質の見方、自然の見方

2日目 (9/6)

9:00～12:00 土壌論、根系論

13:00～15:00 造園施工論、林業技術論(松本講師)

15:15～17:00 樹木生長論

3日目 (9/7)

9:00～12:00 配植論、景観論、ビオトープ論、多様性論

13:00～15:00 景観論、作庭論、公共緑化論(武田講師)

15:15～17:00 施工技術論、材料論、将来予測論

4日目 (9/8)

9:00～12:00 設計基礎論、実施設計論、設計演習

13:00～15:00 緑化論(山田講師)

15:15～17:00 設計演習(終了)

閉講式

今回は、造園・緑化業界に携わる方々、33名が4日間の講座を終了されました。講座終了後に皆様から頂いた感想を一部紹介させていただきます。

◇ 以前、京都でセミナーを開かれていた時には、時々しか参加できませんでしたので、今回全体を通した講義をきくことができ、非常に面白かったです。まだまだ頭の中が整理できておらず、学ばないといけないことや覚えることが多すぎて、どこから手をつけていいやら…なのですが、少しずつ身につけていきたいです。松本先生、武田先生、山田先生も大変ありがとうございました。各分野の第一人者の方々のお話、非常にためになりました。どの分野でも『楽しさ』を感じる感覚が必要だと思いました。

◇ この講義を受けて、今まであたりまえのようにしていた仕事にも、すごく意味があることを感じた。これからの仕事にいかせるよう、もっと深く知りたいです。

◇ 4日間は長いと思ってセミナーに参加させていただきましたが、とても充実した4日間でした。樹木の植栽というのは、単に苗木を植えるだけではなく、樹木の特性、土壌との相性、植栽場所の立地、他の樹木との相性

など、いろいろ考えないといけない要素がたくさんあり、それを教えていただいた先生に感謝申し上げます。樹木1種1種について、それこそ教室の生徒1人1人の性格を話す様にお話しをなさる事について、大変尊敬すると共に、今後は自然配植技術の知識を吸収して、新しい緑化技術として仕事にも活用していく所存です。

◇ 日頃現場を歩きながら、整理できずにいたことを、先生の話聞いて納得することができました。力不足で十分理解できなかった点は、これからの仕事を通じて考えていこうと思います。実際に図面をかくことは初めてで苦しみましたが、大変いい経験になりました。今後とも指導をよろしくお願いします。

◇ 講習は大変むずかしかったけど、日頃の仕事でやっていることが理論で理解できたりしました。また、仕事に対する考え方、人間づきあいなど、先生や受講者の方からたいへん良い勉強ができました。



武田先生



松本先生



山田先生



高田先生

開催日時 : 平成 18 年 8 月 4 日 (金) 14:00 ~ 17:00
開催場所 : ひと・まち交流館 京都
総会員数 : 個人会員 110 名 団体会員 58 団体
出席会員数 : 101 名 (本人出席 40 名 委任状出席 61 名)

会長挨拶

- ◇ 現在、林相転換事業が進んできており、自然配植技術の必要性が高まっている。
- ◇ これまで造園・土木・森林組合は個々に発達してきたが、今日の緑化事業にあたっては、森林の生態や造園の技術、土木的要素など、多様な知識や総合した技術力が求められ、互いの境界線がなくなりつつある。
- ◇ 自然配植のテーマは次の 3 つ、『良質な仕事で生活のできるシステム(社会のしくみ)づくり』、『技術の向上』、『若い技術者の育成』である。数十年後に正しい答えの返る施業や地域性苗木生産のシステムを進めていきたい。
- ◇ 神流川ダムにおける自然再生型緑化(東京電力)についての本の出版を検討中。

役員の改選

- ・ 自然配植技術協会定款に基づく役員の改選
→ 役員全ての留任が認められた。

平成 17 年度事業報告

平成 17 年度は、以下の事業を実施した。

1. 自然配植緑化技術研究

- ① 緑化実施技術研究及び施工実績評価

- ・ 三重県紀勢町錦における岩盤緑化モニタリング(大成建設、濱田武人氏)
- ・ 神流川ダムにおける自然再生型緑化竣工、成果取りまとめ(東京電力)
- ・ 高野山金剛峰寺における切土法面緑化モニタリング(小泉製麻)
- ・ 南禅寺山腹崩壊後斜面地回復緑化(植弥加藤造園、日特建設)
- ・ 岩井川ダムにおける産廃投棄後斜面等の緑化(森林再生支援センター)
- ・ 大台町における皆伐後斜面の自然配植造林(宮川森林組合、田畑了氏)

② テキスト化作業

- ・ 英文翻訳作業 → 未了
- ・ 自然配植造林テキスト化作業 → 未了

③ その他

- ・ 石垣、石組み調査
→ 石垣、石組み内で生育する樹木とその根系についての調査の開始。

2. 自然配植の普及

① 普及、提案

- ・ ミャンマー南シャン州ナウンシン村他(澤氏、高田)での実施

- ・宮川森林組合での提案
 - ・飯田市（国交省飯田国道事務所）での提案
- ②講演会等による普及
- ・9月長野県飯田市（幹事；文吾林造園他：300名）
 - ・その他；福岡県（九州産業大）
- ③設計支援
- ・奈良県岩井川ダム
 - ・熊本県天草上島高規格道路、広島市緑坂ニュータウン法面
 - ・京都市岩倉一条山法面
- ④設計歩掛りの作成（飯田市の島田氏による）
- ⑤その他
- ・自然配植技能者養成講座テキストの発行準備
→ 進んでいない。
 - ・自然配植技能者養成講座施工管理テキストの発行準備
→ 進んでいない。
 - ・ニュースレター発行（11月・5月）
 - ・メーリングリストによるネットワークの拡大（2006.6月現在参加者約280名）
 - ・ホームページの運営

平成17年度会計収支報告

（平成17年7月1日～平成18年6月30日）

*表1を参照。

平成17年度会計監査報告

野々内監事より、監査の結果、平成17年度の会計報告が承認された。

平成18年度事業計画

平成18年度は以下の事業を予定している。

表1. 平成17年度会計収支報告

<収入の部>		
	実績 (円)	予算 (円)
前年度繰越	1,277,908	1,277,908
入会費 団体会員	120,000 (4団体)	150,000 (5団体)
入会費 個人会員	120,000 (24名)	100,000 (20名)
年会費 団体会員(57団体)	983,200 (前年度分2団体(48団体))	1,120,000 (56団体)
年会費 個人会員(109名)	398,400 (前年度分3名(83名))	485,000 (97名)
セミナー受講費 ※3	0	1,350,000
決算利息	12	0
合計	2,899,520	4,482,908
※1 H18/6/30以降、現在までに2団体40000円支払い済。 7団体未集金。 ※2 H18/6/30以降、3名15000円支払い済。 24名未集金。 ※3 平成17年度はセミナーを開催していない。		
<支出の部>		
	実績 (円)	予算 (円)
事務局人件費	1,011,000	1,000,000
研究調査費	0	170,000
印刷費	128,491	150,000
通信費	165,008	230,000
会議費	43,223	20,000
雑費	210	10,000
旅費・交通費	101,260	60,000
事務消耗品費	43,251	70,000
備品費	0	50,000
支部交流会援助金	0	0
家賃・修繕費	60,000	100,000
セミナー開催費※5	0	1,200,000
テキスト作成費※6	0	200,000
予備費(繰越金) ※7	1,347,077	1,222,908
合計	2,899,520	4,482,908
※5 平成17年度はセミナーを開催していない。 ※6 自然配植テキスト英訳は途中のため、平成18年度の支払いとする。 ※7 見学会開催費を含む。		

1. 基本の方針

- ・「自然配植とは何かを社会的に明らかにする」
- ・緑化各分野での技術研究の蓄積推進
- ・緑化工としての運用技術の蓄積
- ・造園技術との整合性（土壌管理、樹形管理、樹種組合せ技術）
- ・治山技術としての根系特性データ化
- ・生物多様性の向上、広葉樹林化、景観改善のための林相改善・転換技術

2. 自然配植緑化技術研究

◇緑化分野

- ・岩井川ダム岩盤緑化での設計資料の総括、施工時立会い
- ・その他の法面緑化設計、施工での技術蓄積

を進め、学会等で公表

◇治山分野

- ・治山有用樹種調査を行い、資料をとりまとめる
- ・京都（南禅寺裏山）で実施した治山工事、技術課題のとりまとめ

◇造園分野

- ・造園空間の持つ「境界性」の克服をテーマとした作庭計画、施工事例の蓄積（滋賀など全国で）

◇造林分野

- ・林相改善・転換の基礎理論資料作成
- ・同実施計画の資料作成

◇土木分野

- ・「自然配植からみた土木的課題」資料とりまとめ

3. 地域性苗木生産者育成支援

引き続き、地域性苗木普及のための生産者支援を継続する

4. 地域専門家グループの緑づくり計画・自然再生事業計画支援

- ・長野県、山形県、熊本県、愛知県（西尾市）などの専門家グループの地域活性化のための自然再生、地域再生事業への計画支援。
- ・企業資金を自然配植へ誘導できるような枠組みを具体化する。

5. 自然配植技能者養成講座開催

9月5, 6, 7, 8日に奈良教育大学で実施する。

6. 自然配植の普及、提案

- ・自然配植英訳資料を海外へ紹介する。

- ・自然配植を実施できるように、各地の支援を行う。

7. 自然配植緑化技術交流会

自然配植緑化を実施した各地で交流会を開こうとする動きを支援する。

8. ホームページの充実

- ・既往資料を順次掲載していく。
- ・会員の技術的課題への取組みを紹介し、交流が図られるよう努力する。

9. その他

- ・ニューズレターは年2回発行する。
- ・技術資料、テキストの書籍出版準備を急ぐ。

平成18年度会計収支報告

（平成18年7月1日～平成19年6月30日）

<収入の部>		
	予算 (円)	17年度実績 (円)
前年度繰越	1,341,474	1,277,908
入会費 団体会員	60,000 (2団体)	120,000 (4団体)
入会費 個人会員	50,000 (10名)	120,000 (24名)
年会費 団体会員	1,000,000 (50団体)	983,200 (48団体)
年会費 個人会員	450,000 (90名)	398,400 (83名)
セミナー受講費 ※1	924,000 (22名)	0
決算利息	12	12
合計	3,825,486	2,899,520

※1 自然配植技術協会集中セミナーを開催する。

<支出の部>		
	予算 (円)	17年度実績 (円)
事務局人件費	1,050,000	1,011,000
研究調査費	50,000	0
事務消耗品費	50,000	43,251
印刷費	200,000	128,491
通信費	200,000	165,008
会議費	50,000	43,223
旅費・交通費	100,000	101,260
セミナー講師謝礼	345,000	0
セミナー資料作成費	200,000	0
英文テキスト作成費	200,000	0
家賃・修繕費	60,000	60,000
雑費	10,000	210
予備費 (繰越金)	1,310,486	1,347,077
合計	3,825,486	2,899,520

質疑応答

Q.石垣石組み調査の目的と調査報告の方法について。

A.日本の石垣や石組みには、石と樹木とを組み合わせた技術が見られます。それは修景性を高めることはもちろん、樹木の根による強度の増加が考えられます。

そこで、石垣・石組みとどのような樹木の組み合わせが存在し、それに対して根がどのような働きをしているのかを観察し、様々な樹木の石や岩盤に対する根の性質をまとめ、今後の治山・造園分野にいかせる保全技術を確立していきたいと考えています。

ぜひ、お近くに石垣・石組みとそこに組み合わせる樹木の根の様子分かる現場がありましたら、協会ホームページより調査票をダウンロードし、場所や石組みの様子、樹木の様子や種名などを分かる範囲で記入、全体の写真や根の様子のアップ写真、種名が不明な場合は樹木のアップ写真などをご提供いただき、調査票と写真を協会事務局までお送りください。(詳しくは協会ホームページを参照。)

データが集まり、まとめが完了しましたら、ホームページやメーリングリスト等で皆様にご報告いたしますので、ご協力の方よろしくお願ひします。

基調講演 『自然配植・海を渡る』

高田会長より、2006年7月、熊本の澤さん(九州ランドスケープ)、佐藤さん(環境生物資源研究所)とともに行ったミャンマーでの自然配植の試みが報告されました。

初めての土地でたとえ種名が分からずとも、それぞれの木の持つ特徴がどのような環境で育つのか、成長の仕方を語ってくれる。それを読み取りながら、将来の森をイメージし配置決めを行う。ミャンマーの人々も、今まで他の方法では駄目だったが、これならきっとうまくいくはず、と自然配植を理解し、受け入れ、そして何より自分たちで考える喜びを見出してくれたようです。

これから日本だけでなく、自然配植の海外への普及を視野にいれています。今回の活動により、希望が見えたような気がします。ミャンマーでの自然配植の経過ともどもお楽しみに。



ミャンマーでの講義の様子 撮影:九州ランドスケープ 澤さん



植栽に使用する苗木 撮影:九州ランドスケープ 澤さん

メーリングリストバックナンバーから

現在、自然配植技術協会会員の皆様、そして自然配植と出会い、興味を持ってくださった皆様とメーリングリストを通して交流していただいております。このメーリングリストもいまや1000通を超え、さまざまな意見交換がなされてきました。その中には、改めて読み返して心をうつものや記憶に残しておきたい知識がたくさんつまっています。最近メーリングリストに参加された方、また日々の生活の中で忘れかけていたものをよみがえらせるため、過去のメーリングリストの中から、ぜひ皆様と共有しておきたいものを今後少しずつニュースレターで掲載していきたいと思っております。

初回は自然配植技術協会の根本である『自然配植』について振り返ります。

No1. 自然配植とは何か

2004年2月22日 14:58 送信者:高田研一 [grtec:0537] 『何を美しいと思うのか』より

いま、自然配植の考えで造園施工をしておりますが、「自然配植」とは何かをもう一度考え直す良い機会となっております。

施工している現場のすぐそばに2本の小さな人工の溪流（流路）があって、ここは15年ほど前にそれぞれ異なる造園屋さんの手によって作られたのですが、石の積み方の技術がまったく違います。

一本の流路は、流路沿いに石を組んでいるのですが、その石の役割は流路と園地の境界を作り出すことに主眼があって、流路の屈曲とは無関係に同じほどの大きさの石が並んでいます。

もう一本の流路は、屈曲に合わせて石の大きさを変えています。カーブの曲がり角（屈曲点；凸部）に大きな石を備え、その背面にもメリハリをつけながら、石を組み、場所によっては流路であっても石を置かず、土のままの岸辺を作っています。

私は当然、後者を評価するのですが、なぜ評価するかといえば、その方が「美しい」からとしか言いようがありません。では「美しい」という感覚は何から生まれるかといえば、われわれ日本人が生来持ち合わせている本能に近い、「落ち着き」への希求と結びついているのではないかと思います。

この落ち着きというのは、石が「不自然」に配されているか、それとも「自然」に配されているかという直感と同じところで考えることができます。「自然」な石の組み方は、安定であって、ゆるぎないものです。地震があろうと、何があろうとその位置を変えることがないゆえに、コケが生え、その隙間にモミジが育ちます。ところが「不自然」な石の組み方は、すぐに壊れていく形ですから、不安定で、人の目に「落ち着き」を感じさせないということができます。谷あいの

比較的新しい土石流斜面での不安定な岩ときわめて古い土石流斜面での安定な岩とを比べると、明らかに石のありようが違います。そして、樹木などの他の周辺要素を排除しても古い安定な岩のあり方が美しいと感じてしまいます。山や溪谷を歩くと、そこにある岩や石は意味があって、そこにあるのだらうと思いますが、その意味は、そこでできた石なのか、運ばれてきた石なのか、なぜその場所に留まっているのか、こういうことを考えていつも山を歩いています。

置こうとする石に、美しさを求めようとするとき、その場所条件はきわめて重要です。地形の流れ、岩脈の流れ、水の流れ、植生の流れと無関係で石は置けません。数十坪の庭で石を置こうとするときでさえ、「小さな自然がそこで永くあれ」という（日本古来の縮景の）発想で、頭の中でこの場所の流れを構想し、そこで石を組んでいけば、美しい庭へと近づいていくのではないかと考えています。

そういう意味でも、自然配植は日本古来の造園の伝統を継いだものであって欲しいし、自然主義的（自然回帰主義的）な緑づくりのルネッサンスとして考えたいと思っています。

いずれにせよ、石を積むとき、余計な不安定な石の存在を許さず、必要不可欠なものだけを積む技術は穴太（あのを）積みに限らず、地域地域で発展してきました。無駄を排除した美しい石積みは結局は歴史にも耐え、ライフサイクルコスト的にみても安上がりだらうと思います。

2006年8月6日 12:57 送信者:高田研一 [grtec:1102] 『自然配植とは何か』より

自然配植について、手を変え、品を変え、表現を変えて、何なのかを書きます。今朝、布団の上で考えたことです。

自然配植は、突き詰めて言うと、「場所を考えること、木（材料）を考えること、使い道を考えることの三つ」だけが原理原則なのですが、これを言うと、「ずるい」と言う人が出てきます。そんなことは当たり前で、みんな、そのことは考えているというのです。

そこでもう少し付け加えて、「周りのこと、先々のことを考える」、と言うのです。ここまでは、だれにも反論のしようがありません。しかも、自分はそのことを考えていると大言壮語できるような人はよほどの知性に乏しい人しかありません。確かに狭い範囲では考えることができても、このことをしっかりと考えることは随分と難しいものです。そこで、人々はこの問題を「ごまかす」ことにしています。

では、どうして、緑づくりの現場に行くと、どうして場所を考えないもの、材料を考えないもの、使い道を考えないものが出てくるのでしょうか。あるいは、それらの三つを十分に考えたと言いながら、実際には周りのことも、先々のことも考えないものが現れるのでしょうか。

◇植木生産者の場合

多くの生産者は広い圃場を持っています。しかし、大部分の人はこの広い圃場を有効活用できずに、ホンの2割か3割の畑で売れるものをつくっています。だれだって作れば売れるものをつくりたいのです。畑の5割で売れるものを作れば大金持ちです。

売れないものはやがて焼却処分ということになってしまいます。

そこで、簡単に言うと、わが国4千種の樹木の内、200種だけを生産することになりました。消費者やコンサルタントに選択する余地はほとんどありません。植木生産者だって、選択する余地を持っている人なんか、ほとんどいないわけですから。

◇コンサルタントの場合

「客観的にみて、リーズナブルな設計」を行うことになっています。個人的なヒイキで材料や方法を決めるわけにはいきません。ただ、それ（「客観性の高いもの＝お施主さまに説明容易なもの」）をどこにどのように配置（デザイン）するかはコンサルタントが自前で考えることができます。そこで、奇をテラッタ、わけの分からないデザインが突如生まれるということになり、その中でも比較的大衆受けするものをデザインした人が、プロとして、その方面の大学の教授になったりします。（ケヤキの樹形がどのように形成されるかという基礎的な植物学を知らずに、ケヤキの樹形デザイン論といった「論文」を書いたりします。）

造園を大学で専攻した人はその程度のデザイン論しか学ばず、土木を専攻した人だって、そこにはわずかな専門知識しか要求されないわけですから、すぐに造園のプロだといって、コンサルタントに名乗りを挙げることができます。

そして、ついには造園コンサルタントという専門業は滅び、造園も土木も、橋梁デザインだっで同時にできるような総合コンサルタントだけが生き残れるようになるのは時代の必然です。ちなみに造園コンサルタントの名前で生き残れるのはデザイン力にすぐれた「作家」もアリです。

コンサルタントにとって今をクリアする力だけが重要です。いま、お施主さまに受ければ、お金になるし、次の仕事につながる。20年先にどうなるかがこうなるかが知ったこっちゃないのが現実です。

◇造園業の場合

造園業といってもさまざま。父ちゃん、母ちゃんのやっているだけのところもあれば、多くの社員を抱えているところもある。都市緑化中心もあれば、寺院庭園管理を主にやっているところもあります。

木陰もない暑い都市で、秋になれば街路樹の落ち葉でクレームが来るからといって、秋口になると驚くほどの強剪定で坊主状態にして、暑さの盛りには、人一人が憩うことができるような樹陰も残らない現実。こういう剪定を行えという仕事を発注されても、逆らえば、仕事は来なくなる現実。

土の事だって、木の事だって、役所の標準仕様どおりのことをやるのが大切で、それ以外の勉強をする余裕も必要ありません。

わずかに樹木医の中の一部の人々や社寺庭園管理のプロ、作庭のプロの一部などには、すぐれた見識と技術をもった人材が残されていて、この造園千年の伝統の厚みというのでしょうか。

今後、益々造園業は分化、分解していくと考えています。多くの地方では、公共事業となる分配原資は縮小し、資本蓄積も緑化に回せる十分なものはなくなっていくことでしょう。その中で、

森林管理施業も土木、治山も含めた総合みどり環境技術者集団が生き残るわずかな道だろうと思っています。

旧来の造園技術は、資本蓄積を果たした都市とその近郊での民間の仕事の中でしっかりと存続できることだと思いますが、これはお施主さまとの長年の関係を築いていくことにメリットがあるゆえに、先々を見通した良い仕事が残る余地があることが大きいと思います。

いずれにしても、造園屋の多くが金に目がくらんで、技術力を落としたことは現実であって、金のために見識をなくすと、周りのことも、先々のことも見えずに、ひたすらお金をくれるお施主（この場合、担当の役人）にだけ、目が向かうことになったわけです。

◇お施主さま、特に役人

役所は、ご承知のようにタテ割りの仕組みになっていて、他の部署のやっていることには口出ししないし、関心も持たない。担当者は3年、長くても5年ほどで持ち場を交代する。前任者の悪口は決して言わない。自分の仕事の成果をすぐ出したがる。まわってきた予算は使い切るなどなど、キリがないほど、仁義とかルールとか悪弊とかが出てきます。

もちろん、見識の高い人はわずかに、性格の良い人は大勢いますから、個人の責任の部分は小さいと考えるべきだと思います。

人間はさまざまな性格があって、だれしも異なる能力、才能があります。これを生かす職場環境とするためには、本来、その能力、才能に見合った仕事や人員配置、期間のスタイルを考えていくこと（まさに自然配植）が重要なのですが、法治国家の矛盾で、何事もマニュアルで、一律にものごとを決めようとする時代です。悪弊の方が圧倒的に勝ってしまいます。今後、小さな政府論が続く限り、見通しとしては暗いものがあります。

そこで、どっこいと、ウラをかく知恵が必要とされています。

周りのことがしっかりと見えないのは、「還元論」＝ものごとを部品部品に分解して、全体としての統合的意義を重視しない、ギリシャ哲学以来の西洋思想。先々のことを考えない「プラグマティズム」＝いま目の前にある確かな（＝数え上げることができる）こと、証明可能なことによってだけ、ものごとを決める仕組み、哲学；アメリカでの資本主義の発達の中でその社会原理として生み出された。この二つの西洋思想がグローバリズムの本体です。

日本中で、儲かるからという魂胆でスギ、ヒノキ、カラマツだけを植えて、結局は困り抜いているように、ここに根本的な問題があるというわけですから、この改良主義たる自然配植は、当たり前の考え方であるにもかかわらず、世の中で広く適用されることがきわめて難しいことは当然のことかもしれません。

ただし、何度も言うように、環境、健康、教育はこのグローバリズムではただちに矛盾を引き起こすものですから、この分野でこそ、次の時代の価値観をつくっていく突破口にもなり得ると考えています。

自然配植技術協会関連活動のご報告

■2006年5月、長野県阿智村にて、『阿智の美しい景観の創造』と題して講演会を行いました。

■2006年6月、長野県王滝村の浚渫土法面緑化現場で施工4年目のモニタリングを行いました。



ススキ敷き均し苗木植栽区と厚層基材吹き付+苗木植栽区、様々な生育状況が見られる。(王滝村)



エコプランター内の植栽の様子(王滝村)

■2006年7月、澤さん、佐藤さんと共に、ミャンマー南シャン州ナウンシン村で自然配植の技術指導、普及を行いました。総会での基調講演では、多くの写真もまじえて紹介されました。その内容を僅かですがp14に掲載しましたのでご覧ください。



ミャンマーでの植栽風景 撮影:九州ランドスケープ 澤さん

■2006年8月4日、京都にて自然配植技術協会第6回定時総会を開催しました。総会につきましてはp11をご覧ください。また、総会翌日(8月5日)には、奈良県岩井川ダム法面緑化現場でエクスカージョンを行いました。大変暑い中、約30名の方にご参加いただきました。現場写真は協会掲示板にアップしておりますのでぜひご覧ください。



エクスカージョンの様子

■2006年9月5~8日、奈良教育大学にて自然配植技術協会集中セミナーを開催しました。詳しくはp9をご覧ください。また、最終日翌日には岩

井川ダム法面緑化現場を見学しました。

■京都市岩倉の一条山において、自然配植を用いた法面緑化工事が行われています(大成建設・植彌加藤造園)。現在作業中ですが、叡山電鉄で鞍馬・貴船方面へ向かう際、西側に作業状況(ただ今植栽前段階)を遠目に見ることができますのでご注目を。



一条山法面(中央) 撮影：植彌加藤造園 薄井さん



ヨシ敷き均し作業 撮影：植彌加藤造園 薄井さん

平成 18 年度年会費 振込依頼

今年度の年会費の振り込みがお済でない方は次ま
でお振込みいただくようお願いいたします。

■振込先

郵便局振替口座

口座番号 00900-7-316541

口座名称 自然配植技術協会

団体会員	年会費	2万円(入会金	3万円)
個人会員	年会費	5千円(入会金	5千円)

※銀行口座へのお振込みも可能です。

京都銀行 修学院支店 普通口座 29408
自然配植技術協会会長 高田研一

※誠に恐れ入りますが、お振込み手数料はご負担
いただきます様、よろしくお願い致します。

石垣・石組み調査

石垣・石組み調査を継続中です。皆さんぜひご参加下さい。参加の仕方は①調査票を記入②写真を撮る③協会へ送る、ととっても簡単です。データが集まればデータベース化する予定です。調査票は下記よりダウンロードできます。

自然配植技術協会ホームページ URL
<http://www.shizenhaisyoku.org/>

会員拡大について

協会の活動をさらに発展させ、自然配植技術を世に広めるため、会員拡大にご協力をお願いいたします。また、メーリングリスト参加希望者も随時募集しております。お知り合いで当協会に興味の
られる方がいらっしゃいましたら、協会事務局までご連絡下さい。

協会掲示板をご活用下さい

自然配植技術協会掲示板を設置しました。緑化現場や地域の植物の画像、質問、報告などにご活用下さい。掲示板に投稿された方は、その旨をメーリングリストへ送信お願いいたします。

自然配植技術協会掲示板URL
<http://www.shizenhaisyoku.org/cont/contribute.cgi>

自然配植技術協会事務局

〒603-8145 京都市北区小山堀池町 28-5

TEL/FAX 075-254-6014

E-mail shizenhaisyoku@pep.ne.jp

URL <http://www.shizenhaisyoku.o>